ジェンダー権力構造におけるペドファイル男性の位置づけ

愛知大学　湯川やよい

1　目的（背景、関心、目的と課題）

本報告は、「非触法ペドファイル Non-offending pedophiles」（子どもを性的対象とするが子どもへの性的接触は行わない小児性愛者）の経験がジェンダー権力構造の中でどのように位置づけられるかを、当事者の語りをもとに考察することを目的としている。 ペドファイルの研究は主に医学等の領域でなされてきたが、近年、触法者のみを対象とした既存研究の偏りが批判され、非触法者を含めた調査は焦眉の課題とされている。一方、フェミニズムやクィア研究の中でもペドファイルは英語圏を中心に一定の関心を向けられてきたが、その主要な学術的探究は文学・表象研究でなされ、特に非触法ペドファイルにかんする経験的な研究はほとんどない。 こうした状況において、報告者は、非触法ペドファイル当事者たちの語りを聞き、記述することを試みてきた。本報告では、特に、1980 年代の G.Rubin による問題提起以降ジェンダー研究者のなかでも未解決のまま取り残されてきた問い――ペドファイルのセクシュアリティはジェンダー権力構造のなかでどのように位置づけられるのか――に注目したい。

英語圏の議論では、その大多数が男性といわれるペドファイルを、（１）「既存の権力構造のなかで排除・周辺化される少数者」と位置づける立場と、（２）「家父長的支配を体現する存在としてむしろ既存の権力構造の中で中心的位置にある」と考える立場の対立がみられる。だが、こうした論争の多くは、抽象化された推論に基づく論者の政治的主張が先行する形で展開される傾向があり、経験的な調査データを用いた十分な検討を欠いたまま、一般化されやすい。 本報告では、多様な非触法当事者の語る経験を丁寧に読み解く作業を通じて、当事者の経験がジェンダー権力構造の中でどのように位置づけられるのか、を検討したい。

2　方法

データは、報告者が聞き取り調査を行ってきた日本国内で生活するペドファイルとしてのアイデンティティをもつ非触法当事者（2015 年～現在継続中）のうち、特に本人の異性愛指向が明確な２名（いずれも 20 代男性）および非異性愛指向が明確な２名（30 代男性、40 代男性）に注目する。

3　結果と考察

考察の結果、以下の点が明らかになった。非異性愛指向当事者のケースでは、学齢期の孤立、内なるフォビアや葛藤など、他の性的マイノリティ研究が示す知見と共通する語りが多く見られた。一方、異性愛指向のケースでは、学齢期の異性愛男性たちとの間でホモソーシャルなピア集団を形成しその内部でペドファイル性を許容・称揚されるなど、周辺化よりもむしろ覇権的な位置づけを享受するエピソードも複数語られる。ただし、これらのエピソードは、同時に、近代家族形成を所与とする異性愛規範からの逸脱が「運命づけられている」（と本人たちが考える）自己の未来をめぐる孤立や不安の語りも伴っている。また、異性愛指向当事者のなかでも、その出自や学歴の違いにより自身のセクシュアリティの語り方や孤立化の程度が大きく異なる点にも留意が必要である。

４．結論

当日の報告では、インタビューデータを参照しながら上記の議論を詳述することで、単純化された抑圧者論／被抑圧者論の二者択一に陥らない、当事者の多様性に注目した位置づけを示したい。